

『赤い鳥』のラフカディオ・ハーン

—茅原順三(森三郎)「赤穴宗右衛門兄弟」を通して—

Lafcadio Hearn in *Akaitori*: A Study of the Adaptation of “Of a Promise Kept”

木田 悟史
(Satoshi Kida)

はじめに

翻訳を通して日本におけるラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn) または小泉八雲像の形成を跡付ける上で、児童文学が果たした役割を無視することはできない。日本の怪談・奇談を語り直したいいわゆる再話ものをはじめとして、ハーンの作品は様々な媒体を通して年少の読者に届けられてきた。大正期に創刊され、後の日本児童文学に大きな影響を与えたとされる『赤い鳥』はその先駆けであったといえる。『赤い鳥』に掲載されたハーンの作品はいくつかあるが、本稿では茅原順三「赤穴宗右衛門兄弟」を中心に取り上げる。同作はハーンが上田秋成『雨月物語』(1776) 中の一編「菊花の約」を英語で語り直して作った「守られた約束 (“Of a Promise Kept”)(1901) をさらに児童向けに語り直したものである。作者の茅原順三とは森三郎の別名であり、森は『赤い鳥』の主力作家として数多くの童話を書いただけではなく、同誌の運営や自身の創作の舞台裏を覗かせてくれる貴重なエッセイも残している。森の「赤穴宗右衛門兄弟」とハーンの「守られた約束」とを比較することにより、日本でのハーン／八雲像形成の一端を探りたい。

I 『赤い鳥』と森三郎—ハーンを介して

作品の考察に入る前に、まずは大枠となる児童雑誌『赤い鳥』の性格と、森三郎の経歴や「赤穴宗右衛門兄弟」執筆の舞台裏を概観しておきたい。『赤い鳥』は1918年、夏目漱石の門下生としても有名な作家鈴木三重吉によって創刊された児童文学雑誌で、芥川龍之介や有島武郎、小川未明、北原白秋など錚々たる作家たちが作品を寄せたことに加え、新美南吉などより新しい児童文学作家たちの作品発表の場となったことでもよく知られている。第1号巻頭に掲げられた「標榜語」は革新的であり、戯作・講談調の抜けきらない従来の子供の読物を乗り越えようとする強い意志に貫かれていた。¹

○現在世間に流行してゐる子供の讀物の最も多くは、その俗悪な表紙が多面的に象徴してゐる如く、種々の意味に於て、いかにも下劣極まるものである。こんなものが子供の眞純を侵害しつつあるといふことは、單に思考するだけでも怖ろしい。

○西洋人と違つて、われわれ日本人は、哀れにも殆未だ嘗て、子供のために純麗な讀み物を授ける、眞の藝術家の存在を誇り得た例がない。

○「赤い鳥」は世俗的な下卑た子供の讀みものを排除して、子供の純性を保全開發するために、現代第一流の藝術家の眞摯なる努力を集め、兼て、若き子供のための創作家の出現を迎ふる、一大區劃的運動の先駆である。²

「俗悪」「下劣」「下卑」といったきつい言葉が目を引くが、森三郎も三重吉のこの熱っぽい日本児童文学史上の「一大區劃的運動」に感化された若者の一人だった。森三郎は1911年、愛知県刈谷町（現在の刈谷市）に生まれた。21歳で『赤い鳥』に入社、編集記者かつ専属の童話作家として活躍したが、同誌との直接的な関わりが始まったのは1931年、復刊後の『赤い鳥』第1号に出ていた「読物のご提供」欄を見て、「赤穴宗

右衛門兄弟」を投稿したときだった。つまり森はハーンを介して『赤い鳥』にデビューしたのである。

本人が書いたエッセイ「私の記者時代」によると、森はハーンの「守られた約束」も、その原典である秋成の「菊花の約」の存在も知っていた。それらを「童話に書いてご提供申しあげて見た」(316) ところ、同年の3月号に掲載されたのである。さらに森は、ハーンの商品がそれまでも『赤い鳥』に掲載されていたことも知っており、すでに「目ぼしいものが書かれてしまっていた」(316) と回想している。

記念すべき『赤い鳥』デビュー作にも関わらず、森は「赤穴宗右衛門兄弟」をあまり気に入ってはいなかったようで、「菊の花の咲く頃には帰ってくると弟に約束して故郷へ発った兄が、お化けになって帰ってくるような、そうした話」(316) が採用されたのは、『赤い鳥』が復刊したばかりで掲載作品の調達に苦勞していたからに過ぎないと本音とも謙遜ともつかない発言をしている。初めてもらった原稿料もそれほど嬉しくなかったと打ち明けており、その理由は、三重吉が大幅に修正を加えたからだった。森としては、登場人物である侍の台詞にそれらしい「時代語」(319) を使いたかったのだが、三重吉の趣味にはそぐわなかったらしい。『赤い鳥』を「開いて見ても再話のことであり、それが自分の作品とは思われない、白々しいものが心を遠ざけるのであった」(319) とまでこぼしている。

森個人にとっては「赤穴宗右衛門兄弟」はプロへの足掛かりという以上の意味はなかったといえそうである。そもそもからしてあまり思い入れのない作品であったばかりか、オリジナルではない再話であり、その再話さえも三重吉に添削されてしまった。しかし、当時の『赤い鳥』ではまだまだ再話ものが重宝されていて、ハーンもその流れの中で受容されていたことを垣間見させてくれるという点では貴重なエピソードである。

関英雄は、森が「私の記者時代」において整理した『赤い鳥』の変遷

を参考にして、同誌を中心にした日本近代児童文学の流れを3期に分けたが、その1期と2期、すなわち、1918年から1930年あたりまでの『赤い鳥』には翻案や再話が数多く掲載されたことを次のように指摘している。「(一)期の連載「古事記物語」をはじめ、各期を通じて多量の翻案、再話を書いた鈴木三重吉を筆頭に、童話といっても純創作でない翻案、再話が、特に(一)(二)期の文壇諸家の作品に多かったのは事実である」(13-14)。

日本の怪談や奇談を平易な文章で語り直したハーンの作品は、児童向けの再話の素材として最適だったのかもしれない。事実、森も回想していたとおり、同誌には森以前にもハーンの再話ものを再話した作品がいくつか掲載されていた。また、本人は「赤穴宗右衛門兄弟」について「再話のことであり」と卑下していたが、酒井晶代によると、森は「日本古典や昔話から、海外作品の再話まで広いジャンルを自在にこなすこと」(241)ができた。

「赤穴宗右衛門兄弟」以降、『赤い鳥』の主力作家兼編集記者として事実上の廃刊まで活躍した森はまさに、「赤い鳥」を読み、「赤い鳥」に書き、「赤い鳥」を論じ(酒井 254)続けた作家であった。

II 森銃三「小泉八雲」による紹介

参考として、森三郎以前に『赤い鳥』に掲載されたハーンに関する記事にも触れておきたい。森三郎が「赤穴宗右衛門兄弟」を掲載したのは1931年3月号であったが、先ほども少し述べたとおり、それ以前からラフカディオ・ハーンまたは小泉八雲の名は同誌にのぼっていた。中でも注目すべきは、三郎の兄であり書誌学者・文筆家として有名な森銃三による「小泉八雲」である。この小伝は1927年6月号に掲載された。

1850年にギリシャに生まれ、アイルランドとイギリスで育ち、若くしてアメリカ合衆国に渡って新聞記者となり、日本に来てからは松江、

熊本、神戸、東京と移り住み、英語・英文学の教師をしながら日本についての書物をいくつも書いて文名を馳せたハーンの起伏に富んだ伝記的事実を、銚三は簡にして要を得た筆致でたどっているが、そこで描かれるハーンの人となりは今から見ると一面的であると言わざるを得ない。もっともこれは児童文学というジャンルの制約を考えれば致し方ないことではあるだろうが。

銚三はまずハーンを「日本人以上に日本を愛し」(76) た「十九世紀における世界的文學者の一人」(76) であると称える。³ そして中盤では、日本の自宅での朝顔のエピソードを紹介する。

ある秋の朝、庭の朝顔がだんだん枯れかけて、隅の方にたった一輪だけ咲いてみました。ヘルン（筆者注：ハーン）はそれを見ると、いきなり、「おお、あなた。勇気と正直な心——」といつて朝顔をほめました。枯れようとする最後まで美しく咲いてゐるのが感心だといふのです。(79)

ところが家の者がその朝顔を引き抜いてしまう。翌朝それを知ったハーンは「あの朝顔に氣の毒しましたね」(79) と悲しみをあらわにしたという。ハーンは死ぬまで「生まれたままのうつくしい、純な心」(79) を失わず、「墓でも蟬でも蟻でも、みんなヘルンにとつてはお友だち」(79) だった。銚三がどこまで意図的だったのかは知るべくもないが、この小伝では、怪談や虫、草花など小さくてはかないものの中に日本の美を見出し、それを深く愛した西洋人の文豪という一つのハーン像が浮かび上がっている。

また銚三は作中で、以前にも『赤い鳥』にはハーン作品にもとづく再話がいくつか掲載されたこと、さらに自分と同じ号に載っている「壇の浦の鬼火」(下村千秋作) がハーンの「耳なし芳一の話 (“The Story of Mimi-Nashi-Hōichi”)」を語り直したものであることも伝えている。弟の三郎が「赤穴宗右衛門兄弟」を書くまでに、『赤い鳥』におけるハーン

受容の下地はある程度作られていたのである。

III 「菊花の約」「守られた約束」「赤穴宗右衛門兄弟」

ここからは作品の考察に入っていきたい。改めて三作品の関係を整理しておく、大本にある「菊花の約」は江戸期の作家上田秋成の代表作『雨月物語』(1776)の中的一篇であり、これをハーンが語り直して「守られた約束 (“Of a Promise Kept”）」(1901)とした。そして、それを森三郎が茅原順三名義で児童向けに再話、1931年に『赤い鳥』3月号に掲載したという流れになる。再話を経るにつれて簡潔になってはいくものの、筋立てに大きな違いはない。以下に述べるあらすじはハーン版による。なお、人物名の漢字表記は秋成の原文に従った。⁴

主な登場人物は赤穴宗右衛門、丈部左門、左門の母親の三人。宗右衛門と左門は義兄弟である。舞台は播磨、時代は“several hundred years ago”(193)とだけ書かれて明言はされていない。ある日のこと、宗右衛門は故郷の出雲へ一時帰省することになるが、菊の節句である9月9日に再び戻ってくることを左門に約束して旅に出る。

約束の日、宗右衛門は真夜中になってようやく帰ってくる。左門は喜んで再会を祝おうとするが、兄は浮かない様子である。実は宗右衛門はすでに死んでいて、左門の前に現れたのは彼の亡霊だったのである。出雲に着いた宗右衛門はいとこの赤穴丹治に会い、自分がかつて仕えていた富田城の新しい城主となった尼子経久に仕え直すように誘われた。しかし宗右衛門はそれを断り、城に監禁されてしまった。弟との約束の日、宗右衛門はその場で自ら命を断ち、霊となって帰ってきたのだった。それだけを語り終えると、亡霊はすぐに姿を消してしまった。左門は単身出雲へ向かい、裏切り者の赤穴丹治を斬り殺し、兄の無念を晴らした。城主の尼子経久はその武勇に心を打たれ、あえて左門を捕えることはしなかった。

上記三作品はそれぞれ細部では大きく異なっているが、本稿の主眼はハーンと森との比較にあるので、秋成については必要に応じて言及するにとどめる。⁵

IV 「守られた約束」から「赤穴宗右衛門兄弟」へ

森三郎がハーンの英文を直接読んでいたという確証はないが、1926年に兄の銚三がハーンの世界集を共訳しており、その中で“Of a Promise Kept”も「約束を守る」と題して訳されているので、あるいはそれも参考にしたのかもしれない。しかし、銚三たちによる訳はオーソドックスであるので、三郎とハーンとを比較検討する際に無視しても差し障りはない。

まずは作品名に注意すると、「守られた約束 (“Of a Promise Kept”）」が「赤穴宗右衛門兄弟」に変わり、兄弟の物語であることが明確になった。秋成版でもハーン版でも、赤穴宗右衛門と丈部左門とは義兄弟であるが、森は単に兄弟としている。これは後ほど検討する作品のテーマである「弟の兄にたいする立派な愛情」(63)を描く上で義兄弟という微妙な関係性がノイズになると判断した結果かもしれない。⁶ ハーン版では宗右衛門と左門の年齢ははっきりしないが、森版の挿絵は年少の読者を意識してか、左門を眉目秀麗な若侍のように描いている。

続く森版の特徴は怪奇趣味を抑えていることである。この物語の読みどころの一つは、宗右衛門と左門が見せる信義の厚さに加え、自害した宗右衛門が亡霊になって帰ってくるという怪奇にもあるのだが、ハーンは帰宅した宗右衛門の様子がおかしいことを彼の沈黙を通して巧みに演出している。約束の日の深夜、二人は念願の再会を果たす。ところが喜びをあらわにするのは左門だけであり、彼が歓待の酒食をすすめても宗右衛門は手をつけず、ひとことも口をきかない。

“As you will, brother,” said Hasébé; and he set warm food and wine

before the traveler. Akana did not touch the food or the wine, but remained motionless and silent for a short time. (196)

対照的に、森版の宗右衛門は多弁であり、話しぶりもごく自然である。

「いや、どうも。おくれて、こんな夜中すぎになつてしまつた。お母さまにもおかはりはないか。」

「ええ ずつとごじようぶでした。今夜はおさきにやんでいただきました。どんなにかおよろこびでせう。ちよつとおさきへ。」と左門は走つて、家へはいりかけます。

「ああこれこれ。今夜はもうこんな時刻だから、お母さまを、おおこししないでくれ。あしたゆつくりお目にかかるから。」と宗右衛門はとめました。

宗右衛門は、足を洗つて、ざしきへ上りました。そして、

「あああ、かへつたかへつた。とうとうおまへやお母さまのところへかへつた」と、お母さまをおこさないやうに小さくかう言つて、あんどんのそばにすわりました。(61)

宗右衛門の様子ที่ただならぬことは行灯の光に照らし出された彼の疲弊ぶりによってわかりやすく読者に伝えられ、ハーン版のような凝った演出は施されていない。本編終了後に作者が顔を出し、「こはい話だと思つてお聞きにならないで」(63)と念を押すが、この書き換えはその方針の端的な現れと見做せるだろう。

では、森はこの物語をどのように聞いてほしかつたのだろうか。上のコメントに続けてこう書いている。「むかしの武士が人にたいして約束をまもる、そのかたい義理だての一例として、又、弟の兄にたいするりつばな愛情の一例としてのみお聞き下さるやうに」(63)。ここに森が掲げた「武士の信義」と「兄弟愛」という二つのテーマのうち、後者に重点が置かれていたであろうことは、「守られた約束」から「赤穴宗右衛

門兄弟」への作品名の変更、そして先述した義兄弟から単なる兄弟への関係性の変更によってすでに察しがつくが、もう一つさらに興味深い箇所があるので、ハーン版と比較しながら指摘しておきたい。

兄の非業の死を知った左門はすぐさま出雲へ向かい、裏切り者の赤穴丹治を斬り殺し、見事敵を討つ。そしてその信義に溢れる振舞いは冷酷な城主尼子経久の心さえ動かした。

経久（筆者注：経久）は、人のわるい男でしたが、この左門の兄にたいする愛情には、すっかり感動して、左門を捕へないやうに命じたので、左門は無事に出雲をにげ出すことが出来ました。(63)

ここでポイントになるのは、「この左門の兄にたいする愛情」という一節である。これを念頭に置いて、同じ場面を書いたハーンの英文を読んでみよう。

And when the Lord Tsunéhisa had heard the story, he gave commands that Hasébe should not be pursued. For, although an unscrupulous and cruel man himself, the Lord Tsunéhisa could respect the love of truth in others, and could admire the friendship and the courage of Hasébe Samon. (198)

左門の行動に感服した経久があえて彼を逃してやったという展開に変わりはないが、その書き方には案外微妙な箇所がある。引用文3行目の“the love of truth in others”というフレーズがそれである。使われている言葉が平易であるにもかかわらず、またはそれだけに、その意味するところは漠然としている。その解釈の難しさは邦訳を見比べるとよくわかる。たとえば、上田和夫は上の引用箇所を次のように訳している。

しかし、経久候はこの話をきくと、丈部のあとを追わないように命じた。なぜなら、経久候その人は無法で残忍な男であったが、他人の誠

実を愛する心には敬意をはらうことができたし、しかも、丈部左門の友情と勇氣には感嘆を惜しまなかったからである。(小泉八雲「守られた約束」『小泉八雲集』48)

問題の“the love of truth in others”を「他人の誠実を愛する心」と訳した上田に対し、田代三千穂は「真実を愛する人々の心」(ラフカディオ・ハーン「約束」『怪談・奇談』173)と訳している。三郎が参照した可能性のある森銚三・萩原恭平は「真実」とのみ訳し、“love”や“in others”は訳していない(小泉八雲「約束」『十六桜 小泉八雲怪談集』75)。

このようにとりわけ“truth”の意味を限定するのが難しく、訳者によってばらつきがある。ハーンの原典である秋成の「菊花の約」の中で該当箇所を挙げるならば、「兄弟信義の篤きをあはれみ」(116)となるが、こちらの方が文意がはっきりしているので、森もさかのぼって参考にしたのかもしれない。⁷いずれにせよ、森版ではハーンの曖昧な‘truth’には触れられておらず、「この左門の兄にたいする愛情」と率直に書き、その結果、「兄弟愛」というメッセージがぼやけずにすんでいることは事実である。

最後にもう一つ、ハーンの日本語使用という点からもハーンと森を比較しておきたい。ハーンの再話作品にはローマ字表記の日本語が多用されるという特徴がある。当然ながら、ハーンおよびその英語圏の読者にとっては、日本の物語とはすなわち遠い異国の物語であった。ハーンはしばしばローマ字表記の日本語を挿入することにより、エキゾチズムを醸し出そうとしている。「守られた約束」では、たとえば、距離をあらわす日本語の「里」がそのまま“ri”と書かれている。さらに、左門と対話する宗右衛門の亡霊が古いことわざを引き、自害して靈魂になって帰還した経緯を明かすくだりでは、そのことわざが丸ごとローマ字表記される。

I remembered the ancient proverb, 'Tama yoku ichi nichu ni sen ri wo yuku' (The soul of a man can journey a thousand ri in a day').
(197)

このようにハーンはローマ字で「魂よく一日に千里をゆく」ということわざを表記し、さらにそのあとに英訳を添えて意味を説明している。日本語が理解できる者にしてみれば冗長に思える書き方かもしれないが、この作品のエキゾチズムを際立たせているという点ではとても重要な箇所であり、またそれだけに日本語への訳し方に迷うところでもある。森の「赤穴宗右衛門兄弟」では次のように処理している。

たましひは日に千里を走るといふ言ひつたへを、おもひ出したからだ。
(62)

妥当な訳し方であるといえるだろう。参考として、先ほども引いた他の訳も見ておくと、上田和夫は「そして、『魂よく一日に千里を行く』という、古いことわざを思い出した」(48)。田代三千稔は「そして、『魂よく一日千里を往く』という古い諺を、思い出したのだ」(172)。森銃三・萩原恭平は、「わたしは古き諺に『魂よく一日に千里を往く』とあるを思ひ出した」(74)。いずれもことわざだけを日本語にし、原文の特徴である英訳による説明は省いている。

しかし、この箇所をたとえばローマ字表記のことわざは片仮名表記にし、付属の説明は「人の魂は一日に千里を旅することができる」などとそのまま訳せば、ハーンの英文のエキゾチズム、言葉を換えれば、ハーンと日本との距離感を読む者にいくらか伝えることも不可能ではない。これは円城塔が『怪談 (Kwaidan)』(1904)の新訳で採用した手法であるが、一見奇を衒っているようでいて、原文におけるローマ字表記の日本語の異物感を伝えようとしている点ではとても忠実な訳であるといえる。⁸

おわりに

森三郎は「赤穴宗右衛門兄弟」の末尾で次のように述べて原典がハーンであることを明言している。「小泉八雲という名で、日本の人になって、なくなつた、アイルランド人、ラフカディオ・ハーンは、日本のことを多くの本にかきました。その中の一つのお話です」(63)。ここで注目すべきは、大本にある上田秋成については一言も触れられていないことで、読者の中にはハーンが一からこの物語を書いたと思った者もいたかもしれない。

本稿では、『赤い鳥』に掲載された森三郎の再話を中心に取り上げ、日本児童文学におけるハーン／八雲受容の一端を探った。森の「赤穴宗右衛門兄弟」の特徴としてまず挙げられたのは、怪奇趣味が抑えられ、それと同時に兄弟愛のテーマがより明確になったことである。これは、編集長の鈴木三重吉が手を加えた結果かもしれないが、森本人の作風に起因するところも大きかったと考えられる。酒井晶代によると、兄弟愛は森童話が好むテーマの一つであった(250)。

もう一つの、そして見方によっては最も重要な特徴は、ローマ字表記の日本語の扱い方である。ハーンは英文中にいきなりローマ字表記の日本語を挿入することにより、英文の読者に対してエキゾチズムを演出していた。しかし、森版ではそれが消去され、まるではじめから日本人が書いたかのように自然な文章になっていた。これは児童文学というジャンルに配慮すれば止むを得ない措置ではあるだろう。いくつか例を挙げたように、一般向けの邦訳でさえそれを再現するのは必ずしも簡単なことではない。その点、ハーンの英文中のローマ字表記は基本的にすべて片仮名で訳し、あえてその違和感や不自然さを再現しようとした円城塔の新訳は画期的であるといえる。

しかし、児童文学の中でもそのような試みが皆無だったわけではない。たとえば、岩波少年文庫版の訳者である脇明子は、次のようにその翻訳

方針を述べている。「(中略) 特にエッセイのほうでは、ハーンがローマ字で書いている日本語は、なるべく片仮名で表記するなど、「外国人の目」の感覚がわかっていただけに工夫してみました」(ラフカディオ・ハーン『雪女・夏の日の夢』10)。

ハーンが多くの日本人よりも日本を愛し、日本を深く理解していたというのは一面では事実である。しかし同時に、アウトサイダーとして日本を外から見ていたというのも同様に忘れてはならない事実であるだろう。それが誤解や偏見であったとしても、その「外国人の目」をいかにして、そしてどれだけ訳文に反映させるのか。これは児童文学にとどまらず、すべての邦訳者が直面せざるを得ない問題である。訳者のその匙加減は日本におけるラフカディオ・ハーン／小泉八雲象の形成に大きな影響を与えてきたに違いなく、さらなる研究を要する課題である。

注

1. 『赤い鳥』の文学史上の重要性については、河原和枝『子ども観の近代—『赤い鳥』と「童心」の理想』が詳しい。本稿の議論も同書に負うところが大きい。
2. 原文の旧仮名遣い・旧漢字の一部はそれぞれ現代仮名遣い・新漢字に改めた。
3. 本文中での森銃三「小泉八雲」からの引用については、一部の旧仮名遣いを現代仮名遣いに改めた。
4. ただし、高田衛・稲田篤信校注『雨月物語』収録の「菊花の約」による。
5. ハーンの「守られた約束」と秋成の「菊花の約」との相違は拙論「ラフカディオ・ハーン「守られた約束」の再話手法」でいくつか指摘している。
6. 本文中での「赤穴宗右衛門兄弟」からの引用については、一部の旧仮名遣いを現代仮名遣いに改めた。
7. 平井呈一訳「守られた約束」も秋成を参照した可能性が高い。平井はこの一節を次のように訳している。引用文中の下線による強調は筆者による。「経久はこのよしを聞いたとき、丈部に追手をかけぬように命じた。これをもって見るに、さすがに暴戻酷薄の経久といえども、人の信義に篤きはこれを尊び、丈部左門の友愛と勇猛を賞する心ばえはもっていたものとみえる」(小泉八雲「守られた約束」『日本雑記他』398)。なお、“the love of truth in others”の解釈については、

上記の拙論でより詳しく考察している。

8. 円城は“The Story of Mimi-Nashi-Hōichi”の新訳である「ミミ・ナシ・ホーイチの物語」を掲載した『幽』vol.21において、「はじめて『Kwaidan』を目にした英語圏読者の気持ちを想像してみるための」(230) 翻訳方針を次のように明かしている。「この翻訳にあたっては、文のつながりや体裁をおおむね保ち、直訳に近い形ですすめるという方針である。解説のされていない単語はなるべくそのままとし、日本での用語にはあまり噛み砕かない」(230)。

参考文献

- Hearn, Lafcadio. “Of a Promise Kept.” *The Writings of Lafcadio Hearn* X. Boston and New York: Houghton Mifflin, 1922. Reproduced by Rinsen Book Co., 1988. Print.
- 上田秋成「菊花の約」『雨月物語』高田衛・稲田篤信校注. 筑摩書房, 2015. Print.
- 河原和枝『子ども観の近代—『赤い鳥』と「童心」の理想』. 中央公論社, 1998. Print.
- 木田悟史「ラフカディオ・ハーン「守られた約束」の再話手法」『神戸英米論叢』第28号. 神戸英米学会, 2015. 17-31. Print.
- 小泉八雲「守られた約束」『小泉八雲集』上田和夫訳. 新潮社, 2005. 44-48. Print.
- 「守られた約束」『日本雑記他』平井呈一訳. 恒文社, 1996. 393-398. Print.
- 「約束を守る」『十六桜 小泉八雲怪談集』森銑三・萩原恭平訳. 研文社, 1990. 69-75. Print.
- 酒井晶代「〈解説〉森三郎・人と作品—「赤い鳥」との関りを中心に」『森三郎童話選集かささぎ物語』. 刈谷市教育委員会中央図書館編. 1995. 232-256. Print.
- 鈴木三重吉「「赤い鳥」の標榜語」『赤い鳥』1918年第1号(複製版). 日本近代文学館, 1979. Print.
- 関英雄「「赤い鳥」の童話」『赤い鳥』複製版解説・執筆索引. 日本近代文学館, 1981. 12-21. Print.
- 茅原順三(森三郎)「赤穴宗右衛門兄弟」『赤い鳥』1931年第1巻第3号(複製版). 日本近代文学館, 1979. 58-63. Print.
- ハーン, ラフカディオ「ミミ・ナシ・ホーイチの物語」円城塔訳. 『幽』vol. 21. KADOKAWA, 2014. 218-234. Print.
- 「約束」『怪談・奇談』田代三千穂訳. 角川書店, 2009. 168-173. Print.
- 『雪女・夏の日の夢』脇明子訳. 岩波書店, 2003. Print.

『赤い鳥』のラフカディオ・ハーン

森三郎「私の記者時代」『赤い鳥代表作集 3 後期』. 小峰書店, 1964. 313-330. Print.
森銑三「小泉八雲」『赤い鳥』1927 年第 18 巻第 6 号 (複製版). 日本近代文学館,
1979. 76-79. Print.

本稿は平成 28 年 12 月 3 日に同志社大学にて開催された日本比較文化学会関西・
関東・中部支部合同および関西・中国四国・九州支部合同 12 月例会での研究発表
原稿に加筆修正を施したものである。

本稿は平成 28 年度-29 年度 JSPS 科学研究費助成事業若手研究 B「ラフカディオ・
ハーンの邦訳研究—再話作品を中心に」(JP16K16785) の助成を受けたもので
ある。